



今

を生きる子どもたち ～前思春期を考える～

教育相談部では、学校不適応の未然防止に向け、「前思春期(小学校3、4年生頃)」に着目した研究を進めているところです。

8月に実施した講座『今を生きる子どものこころ』講座ー前思春期・思春期の子どもの世界ー(講師:京都大学大学院 大山泰宏准教授)において、「前思春期」について大変興味深いお話がありましたのでその一部分を紹介します。

◇前思春期の発達段階のテーマ◇

前思春期は、これまで児童心理学では「潜伏期」として、凧の時代と考えられていましたが、実は内面的には大きな変化が生じている時期なのです。
例えば・・・



* 認知的機能

それまでは感覚的に見たままを記憶するような記憶システムであったのが、意味づけや法則を見出した記憶の仕方をするようになります。

また、抽象的な概念(例:速さ、比重等)や、長期的な見通しをもった時間感覚がもてるようになります。

(例:10年後、30年後の自分はこうだ、という感覚がもてるようになる。それまでは1年後の自分と10年後の自分の違いはあまりよくわからない。)



* 自我体験

自分が自分であるという強烈な感覚や自分の存在への違和感を伴う体験、今まで当たり前だと思っていたことが当たり前でなくなる衝撃的な感覚などを体験します。

(例:「なぜ自分は人間なんだろう?」
「自分は本当にこの家の子?」
「自分が死んだらどうなるの?」
「宇宙の果てはどうなっているんだろう?」
というような考えが生じる。)



* チャムシップ

同性の友人との鏡映のような親密で排他的な関係。この一体感のある関係の中で互いの共通点や内面の類似性を確かめ合い(例:相手と同じことをする、同じキャラクターの物を持つ等)、安心感をもちながら自分を見つめる力が育ちます。

前思春期の時期の子どもたちの内面では、このような変化が生じることを理解した上で関わるのが大切です。

ところが近年、さらに年齢を重ねても前思春期のテーマを乗り越えられずにいる高校生(大学生・大人でも)が増加しているような印象があります。

その背景として、モバイルメディアの発展による影響が考えられます。例えばSNSのグループ内では親密な二者関係を築きにくく、排他的な関係のみになってしまうこともあります。つまりそのグループの中では親密さを享受するというよりも、自分が排除されることへの不安に取りつかれてしまうためチャムシップが築きにくく、親密な

関係の誰かとともに心の揺れを乗り越えて成長するということが難しいと考えます。また、様々なメディアによって次々と多方面からリアリティが飛び込んでくるため、何が自分にとって重要なリアリティなのか、どこに自分の軸を置けばよいのかわからず、確かな「自分」を形成することが難しくなっているという状況がみられます。常に誰かとつながっていると、全く一人で「私」に立ち戻る時間がなく、固有の内面が成立しにくくなるとも考えられます。

さらに、「青年期」が消失しつつあるのではないかと考えられます。青年期といえば、かつては大人の文化に反発する青年集団独自の文化があり、自分たちはどこに所属し、何者であるかという集団としてのアイデンティティが明確でした。しかし、近年そういった文化が失われつつあることから、青年期という受け皿がなくなり、仲間関係の一体感の中でアイデンティティを獲得することが難しくなっているのではないかと考えられます。

このようなテーマや状況を踏まえ、大山先生は「今を生きる子どもたちの問題を、まず大人が、自分たちが生きる世の中の現状を見つめた上で理解することが重要。また、前思春期のテーマが長く残存している子どもが多く見られる状況も理解しておくこと。子どもの発達段階を理解し、個々が成長する上で必要な関わりを、教職員集団で分担しながら行い統合させることが大切。」といった、児童生徒と向き合う上での多くの示唆をくださいました。

「やってみよう」から、
「できる」へ。

<こんなことを学びました。更に実践を続けます。>

小中でつなぐ外国語教育講座 I (外国語活動)



「外国語活動と外国語科は
どう違うの?」



共通していることは、
音声中心ということです。

研修講座特集

【受講者の学び】

・絵本の活用の仕方について、直山調査官の実演があったので大変よく分かりました。今までは、What's this? を使ってばかりでしたが、スリーヒント型や発音をリズムカルにすること、形から動物を推測させることなど、子どもたちから言葉を引き出しながら読み進めることを学びました。



活動は、慣れ親しむことが目標ですから、英語はその単元の間、覚えていければよいこととなります。忘れても、また慣れ親しめばよいわけです。

一方

教科は、定着することが必要ですから、忘れずに蓄えておくための工夫が必要となります。そのためには複数の技能を組み合わせて学習することが効果的です。

(「小中でつなぐ外国語教育講座 I (外国語活動)」の講義から)

次号では、「小中でつなぐ外国語教育講座 II (外国語活動)」を紹介します。

校内組織の活性化、学校等での研修を支援するために実施しています。今年度、実施した講座から紹介しています。お申し込みは「研修講座の概要」を御覧ください。(2月末日まで実施可)

授業づくりのポイントを実技演習を通して学べるように展開しています。

子どもの力を引き出し伸ばすには、子どもの実態に合わせた授業の工夫が欠かせません。

身に付けさせたい力をどのように身に付けさせるか、考えるヒントとなればと思います。

◎小学校図画 工作科教育講座



「時間数が少なくて、どう指導していいのかイメージがわからない…」、「言語活動を通して指導するって具体的にどんな授業だろう…」、「児童が主体的に取り組む国語の授業を構想したい…」、こういった疑問や悩みの解決に向けて、実際に物語を読んで好きなどころを紹介したり、説明する文章を読んだりといった演習を通して、体験的に学んでいくことを重視しています。

演習では、実際に教科書に掲載されている教材を使って学んでいきます。

実際に体験することで国語科の単元を構想するヒントになればと思います。

また、演習で扱う教材についても説明的な文章なのか、文学的な文章なのか、各校のニーズに合わせて調整します。

◎小学校 国語科教育講座



出前講座

◎情報教育講座

ニーズに応じてセンターからタブレット端末を持参し、実際に操作をすることで、授業での活用方法を学びます。

受講者には写真や動画でイメージがしやすいという特徴や操作性を体感する中で、ICT活用が目的にならないよう、授業のねらいに沿った手段としてICTを有効に活用する方法を考えます。

◎特別支援 教育講座



平成28年4月1日に「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」が施行されました。

それに伴い、全ての公立学校で「合理的配慮」を提供することが法的義務となりました。この法律の要旨と、法律の施行に伴って学校が担うべき役割について講義を行っています。

また、発達障害等の子どもを含めてどの子どもにもわかりやすい「ユニバーサルデザイン授業」の内容の講義も行います。

仮想事例による研究協議を通して、学校でどのような合理的配慮が提供できるのか等、実践的な考えを深めます。

